Is War?

特集2

Why War?

ひとはなぜ戦争をするのか？

このシンポジウムは2024年7月の「高野山会議2024」最終日にセッション6「Why War?：ひとはなぜ戦争をするのか?」として行われたものです。高野山会議の試みをスタート地点として、今後、本テーマの議論はさまざまな場所で続けていきます。

第1部　基調講演

杉山所長　おはようございます。高野山会議の最終日になりました。このセッションでは、東京大学先端科学技術研究センター（以下、先端研）がイニシアチブをとっておりますけれども、先端研にとどまらない、幅広い英知を集めて高野山会議を広げることによって、世の中が直面している今一番深刻な問題に対して、何とか答えを見つけるきっかけをここで作ろうという実験的な目的のもとに行っています。ということで、ここにいる皆さんは、この高野山会議4回目にして初めて行う壮大な実験の共演者です。会場の方からも積極的な参画をお願いします。

セッションの予定の2時間半だけでは終わらないと思いますが、今日をきっかけに、高野山の精神をも取り入れた、「世界をまあるくより明るくしていく提言」を目指して議論を継続していきます。

今回のテーマ「Why War?　ひとはなぜ戦争をするのか?」をご提案いただいた先端研フェローの小泉英明先生からは、アルバート・アインシュタインとジグムント・フロイトの著書『ひとはなぜ戦争をするのか』（講談社文芸文庫）を読み解くことが、この最も深刻な課題に取り組んでいくスタートポイントになるとご示唆いただきました。国際連盟の依頼から始まったこの往復書簡が1933年に出版されてから90年経った今でも、人類は戦争を繰り返しています。90年前には、例えば人間の体の設計図であるDNAゲノムを全部読み取ることなどは、考えられなかったわけですが、DNAは全て解読されているわけです。そうした科学技術の進歩は圧倒的なものとなり、私達を取り巻く環境は大きく変わってきました。

こうした現在の科学技術論、哲学・宗教を含めた分野横断的な知見を取り入れてくださる先生がたにご登壇いただきました。今回はたまたま東京大学の先生がたが集まりましたが、このセッションは東大の中で閉じるつもりは全くなく、今後、日本全体のアカデミア、様々なステークホルダーの方々をも巻き込み、次

司会の杉山正和先端研所長（教授）

のステップでは国際的に議論を展開していきたいと考えています。

それでは小泉先生、最初の基調講演、よろしくお願いいたします。

小泉英明フェロー　まずはこの書簡の書き手であったアインシュタインは相対性理論など多くの新発見で知られている物理学の天才でした。もう一人の書き手フロイトは、精神科学、精神医学で一般に知られています。１８９５年に"Project for a scientific psychology"という手書きのノートを残して、神経系がまだ発見されてなかった時代に、神経による回路図を描いた天才です。国際連盟が依頼し、アインシュタインが書簡の相手に、そのような科学者だったフロイトを選んだことは非常に深い意義があったと考えています。その後、物理学の本質はあまり変化していませんが、生物学は根底から大変化しました。

この二人の間で手紙が交わされた後、第二次世界大戦を経て、アインシュタインと物理学者レオ・シラードが、ナチスよりも先に原子爆弾を作るべきだと当時のアメリカ合衆国のルーズベルト大統領に直接手紙を送りました。この書簡の年に、アドルフ・ヒトラーは首相に就任したのです。アインシュタイン自身は直接原爆の開発に携わったわけではないのですが、原爆の開発はアメリカが先行し、結果的に広島と長崎に落とされました。

映画にもなりました、ロバート・オッペンハイマーが関わったマンハッタン計画ですね。このオッペンハイマーがいた研究所（ローレンス・バークレイ研究所）に、私自身も客員物理学者として招聘され、量子物理学の社会実装をやっていたんです（１９７７～１９７８年）。このとき、マンハッタン計画に関わった多くの研究者から、戦時中の状況を直接聞いております。当時、オークリッジに大きなウラン濃縮工場が置かれました。ウランを濃縮さえしてしまえば、誰でもちょっと知識があれば簡単に原子爆弾を作ることができます。ところが原子炉からのプルトニウムの場合はかなり複雑で、米国のトリニティ計画ではじめて実験が成功しました。その後すぐ、プルトニウム爆弾を長崎に持っていく訳です。その前の広島の原爆は、ウラニウムさえ濃縮できれば簡単なので、事前の実験もしていません。一方、戦時中でも原爆・水爆の開発に反対していた人たちのグループは、ＭＩＴのRadiation laboratory（放射線研究所）を中心に高分解能レーダーの開発に専念しました。こちらは、ミサイル（Ｖ１）や潜水艦（Ｕボート）の早期発見に本質的に寄与しましたが、原爆の方はパンドラの箱を開けてしまったのです。

１９５５年にはラッセル＝アインシュタイン宣言が発出されます。これは、イギリスの哲学者バートランド・ラッセルとアインシュタインが中心となり、米ソの水爆実験競争に対して核兵器の廃絶と科学技術の平和利用を訴えたものでした。この宣言に署名した直後にアインシュタインが逝去したので、「人類への遺言」ともいわれました。この宣言を機に、すべての核兵器や戦争の廃絶を訴える科学者による国際会議パグウォッシュ会議が開催されました（１９９５年にノーベル平和賞受賞）。にもかかわらず、今に至るまで核の所有は続いている上に、今では広島どころの騒ぎではない、戦後すぐの最初の水爆実験でさえ、広島の６２５倍（10メガトン）です。昔の大気圏内実験でも、スライドでお示しするように、戦術核は大砲から簡単に撃てる。そういうような現実をもっと議論しなければいけないと考えています。世界で起きている紛争も戦争も、そして核兵器の開発にもいえますが、始めてしまうと止めるのはものすごく難しいことであります。

現生人類のホモ・サピエンスの歴史はまだ７―８万年しかないのです。進化してきたといっても、私たちの脳は野生動物と基本的にはほとんど同じです。だから、簡単に何かきっかけがあれば、薄皮みたいな理性が簡単に吹っ飛ぶんです。

現生人類はどこが変わったかという研究ばかりされていますが、我々はほとんど動物で、

動物は自然のシステムの中で生きているから、結果的に一見均衡がとれていますが、人間が野性の心をむき出しにすると、とんでもないことが起こるわけです。この高野山会議はこの議論をすることに、とても適していると考えております。

杉山所長　小泉先生どうもありがとうございました。客観的な史実を基に、今回議論したいことを見事にイントロダクションしていただきました。今度は哲学者の中島先生に考察を展開していただきたいと思います。それでは中島先生よろしくお願いいたします。

中島隆博所長　アインシュタインとフロイトの年齢は、生年を見ていただくと、一世代ちょっと違います。ところが、アインシュタインはフロイトのことをとても尊敬しており、書簡の相手はフロイトしかいないと考えたということです。

アインシュタインの議論のポイントは二つあります。

一つは、戦争をなくすためには、国際的な機関しかも強力な機関を作り、各国が主権を制限するというものです。国際連盟が曲がりなりにも発足し、主権の制限という議論に踏み込んで、その後もずっと今に至るまで続いています。第二次世界大戦後でも、主権問題は、国連でも議論され、国民を保護できていない国家に対しては、介入してもいいんじゃないか、とまで進展しました。直近ではリビアへの介入がその例です。この保護する責任という議論に基づいて、介入をしていったのです。

ですからアインシュタインが考えた、主権の一部の放棄、主権の制限という議論は現代に至るまで続いているというわけです。しかし果たして本当にこのやり方でいいのか。つまり国家の主権を制限して、それよりも強力な超国家っていうのを作る・・・そのアイディアがいまだに有効かについて、あらためて問われなければならないと思います。

もう一つアインシュタインの中にあったのは、戦争の原因は、人間の心にあるのではないかということです。心の問題をなんとか制御していけば、戦争の問題がある程度解決できると考えたわけです。それをフロイトに聞きたかったのがこの書簡です。

アインシュタインの頭の中には、人間の心がどうやら権力欲とか憎悪、破壊への衝動、こういったもので満ち溢れていて、その結果、少数の権力者たちが大多数の国民の心を思うままに操るようになっている。この構造を何とか乗り越えることができないか。これがフロイトへの一番重要な訴えだったわけです。

それに対してフロイトは、アインシュタインの手紙の何倍もの文章を書いて返答します。フロイトの結論を先に申し上げておくと、文化の発展を促すと戦争の終焉に向けて歩み出すことができるというものです。

ここでフロイトがいう「文化」とは何か？

これが最大の問題なわけです。アインシュタインはドイツ語でRechtとMacht、つまり権利と権力の問題で超国家的な議論を展開していたわけですが、フロイトはRechtとMachtだけはうまく説明がつかないので、Gewalt つまり暴力ですね、この問題をぜひ考えるべきだと述べたのです。これは非常に踏み込んだ発言だと思います。20世紀の政治学の中では、Recht/Macht 英語で言うとRight/Might の問題は、Might is not right つまり、力では政治的なその支配の正統性、正しさには向かわないからこそ、別の正統性を考えなければいけない、と論じられてきました。

フロイトはそのことを知ってか知らずかわかりませんが、本当に問わなければいけないのは、そのRecht/Macht の手前にあるGewalt暴力の問題、これが人間の社会にはつきまとっているというわけです。Recht権利の支配、さらには集団の団結というものも、結局はGewalt暴力ではないか。暴力によってより高次のRecht権利やMacht力の支配を考えなければいけないというわけです。

人間は暴力を用いて不平等を解消しようとする一方、もう一つ文化が用いられる場合もあ

ると、フロイトは考えます。ただし今のあり方、現状では法による支配を支えるために暴力が必要だ、とフロイトはなんというか、シニカルなものの見方をしていたと思います。

では、文化の可能性はないのかというとそんなこともないわけです。

フロイトは、人間には二つの欲動、エロス的欲動と破壊し殺害する欲動、すなわち生への欲動と死への欲動があるといいます。特に後者はフロイトが第一次世界大戦の後に提唱した新しい欲動ですが、この二つの欲動は綺麗に分けられないものであり、過去の残虐な行為を見ると、理想を求めるという動機は残虐な欲望を満たすための口実に過ぎないとも言っています。

戦争は、人間の良心に訴えかければ止むのではないか、という問いには、フロイトはいやいやそんなことはない、人間の良心すら攻撃性の内面化から生まれていると言います。フロイトは、人間の善性を単純に想定せず、人間は根底的な暴力に貫かれていると強力に思っているのです。

次が一番重要なところです。こうした文化の発展によると、文化を発展させた人は子どもを産まなくなってきていると言っているのですが、文化が発展してきていない人たちは子どもをたくさん産むと言っているのです。フロイトは家畜化としての文化、これを推し進めることで、人間の肉体レベルで変化が起きて、その暴力性が消えていくのではないか、でもそれは子どもを産まなくなるのと、同じだと述べるのです。フロイトの議論の前提にある枠組は、要するに、文明と野蛮の区別、それから少数の権力者と、それに従属する大多数の被支配者、そして人間と動物という図式なわけです。

PROFILE

小泉 英明
東京大学先端科学技術研究センター・フェロー

専門は分析科学、教育科学・哲学、異分野間架橋融合、もの造り。東京大学教養学部基礎科学科卒業、（株）日立製作所入社、論文提出による理学博士。現在、日立製作所名誉フェロー、（公社）日本工学アカデミー顧問／名誉上級副会長。量子理論を応用した新計測原理の創出と実用化（偏光ゼーマン原子吸光：現在、分析機器・科学機器遺産）、脳機能計測による学習・教育（MIT Review誌選定2001年度世界4大ブレ―クスルー技術）。

中島 隆博
東京大学東洋文化研究所長・教授

専門は中国哲学、世界哲学。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。博士（学術）。主な著書に『共生のプラクシス』（東京大学出版会、和辻哲郎文化賞受賞2022）、『思想としての言語』（岩波書店 2022）、『日本を解き放つ』（共著、東京大学出版会）、『荘子の哲学』（講談社学術文庫 2022）、『中国哲学史』（中公新書 2022）、『日本の近代思想を読みなおす 1　哲学』（東京大学出版会 2023）、他。

宇野 重規
東京大学社会科学研究所長・教授

専門は政治思想史、政治哲学。東京大学大学院法学政治学研究科博士課程修了（法学）。千葉大学法経学部助教授などを経て現職。主な著作に『政治哲学へ：現代フランスとの対話』（2004、増補新装版 2019）、『トクヴィル 平等と不平等の理論家』（2007、講談社選書メチエ、講談社学術文庫版 2019）、『保守主義とは何：フランス革命から現代日本まで』（2016、中公新書）、『民主主義とは何か』（2020、中公新書）など。

私はこの区別を考え直すべきじゃないかと思っています。例えば、フロイトの言葉で、「人間は指導者と従属するものにわかれる。だから優れた指導者層を作るために努力をしなきゃいけない」あるいは、「戦争は自然世界の掟に即していて生物学的なレベルでは健全だ。現実は避けがたい」と書いています。この発想自体が根本的に間違っていると、私は主張したいと思います。

必要なことは家畜化としての文化という発想を乗り越えることです。何かに充足するでもなく、一体感や、国民的なアイデンティティに埋没するのでもなく、文化が「複数の仕方である」と「複雑で矛盾したわたし」から成り立っている。そのような複数的な文化を生きる方向へ持っていかなければいけないのではないか・・・。

それは人間と動物の区別を根本的に見直すことであって、less than human（＝あまり人間的ではない）として見られてきた人間の一部の人たち、つまり奴隷とか女性、子どもや老人、それから動物・植物環境ですが、この見方を根本から改めた方がいいのではないか。戦争は野蛮なものだから動物的なものが発露した、と考えがちですが、動物は人間のような戦争を起こさないわけです。わたしは逆だと思っていて、人間しかそんなことはしないのです。だから、ある意味で、動物に学んだ方がずっといいのではないかと考えます。

たとえば、この高野山を開いた空海が書いた「声字実相義」というテキストがあるんですが、人間の見方や世界の見方において、空海はまったく違っていたわけです。声字実相義は、音声と文字がそのまま真理を表すとする密教の考え方を述べたものです。別のところで、アインシュタインは科学と宗教について二つ論文を書いているんですが、１９４１年に書いた論文ではっきりと人格神をもうやめるべきだ、宗教をやめて倫理的な善に向かっていかなければいけないと主張しています。

フロイトも厳しく宗教を批判していたことは、みなさまご存知かと思いますけれども、やはり、宗教による支配と従属から解き放っていき、別の精神性や宗教性を回復していくことを主張しました。ちなみに仏教が宗教になったのは近代になってからです。仏教が宗教の手前にあるという観点を取れば、仏教の可能性は大きいと思います。

アインシュタインは、科学は、存在の中に敷衍している合理性の荘厳さ、これに謙虚な対応をとることで、それは最も高い意味における宗教的なものだと考えます。このような仕方で科学と宗教を結びつけることをアインシュタインは主張したのです。言うまでもなく、ここで言う宗教はあくまでも人格神的なものとは別の宗教だと言うことです。

ですから人間の再定義、人間と動物の関係の再定義、それが今のわたしたちには求められており、アインシュタインとフロイトの往復書簡はそういう問いをわたしたちに残してくれているのではないかと思います。どうもありがとうございました。

杉山所長　はい。本当にありがとうございました。これから始まる第2部のディスカッションにまさに繋がるですね。この中でフロイトとアインシュタインの書簡を読まれた方もいらっしゃるかと思いますけれども、中島先生ならではの切り口の鋭く、ある意味フロイトに対する強烈な批判も含めたその考察に改めて敬意を表します。

～10分休憩中BGM：
"Freud and Jung and Adler（フロイト・ユング・アドラー）"（ミュージカル"Pardon My English"より）ジョージ・ガーシュイン作曲/アイラ・ガーシュイン作詞～

第2部　Trans-disciplinary（TD）トーク＊

杉山所長　皆さん、改めまして第2部に入りたいと思います。よろしくお願いいたします。ここからはTrans-disciplinary（TD）（トランスディシプリナリー）トークということで、前半の小泉先生、中島先生の基調講演を受けつつ、さらに幅広い視点から、「Why War? ひとはなぜ戦争をするのか？」という問題に切り込んでいきたいと思います。

それでは第2部のメンバーをご紹介させていただきます。

まずは、先ほどご講演いただきました小泉英明先生、それから中島隆博先生、ここからのご参加となります宇野重規先生、東京大学社会科学研究所の所長を務めておられます。太田博樹先生、東京大学の理学系研究科教授をされておられます。池内恵先生は東京大学先端研の教授です。同じく先端研特任教授の国末憲人先生です。以上ですが、実はこの議論がどこまで展開するか、若干私も不安で、慌ててもう一名ご登壇い

＊Trans-disciplinary (TD) とは、サイロ化された学術分野を超えて、産官学民の境を超えて、さらに基礎から応用への境を超えて共創し、社会実装可能な創発(Emergence)を目指すことです。

PROFILE

太田 博樹
東京大学理学系研究科・教授

専門は、人類集団遺伝学、分子人類進化学、ゲノム人類学。1997年、東京大学・理学系研究科にて博士（理学）修得。1999年、マックスプランク進化人類学研究所、2001年、イエール大学医学部での博士研究員を経て、2005年、東京大学・新領域創成科学研究科にて助教。2010年、北里大学医学部にて准教授。2019年より現職。主な著書：『古代ゲノムから見たサピエンス史』（吉川弘文館 2023）、『遺伝人類学入門』（ちくま新書 2018）など。

池内 恵
東京大学先端科学技術研究センター・教授

専門はイスラム政治思想、政治学。東京大学文学部イスラム学科卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学。日本貿易振興機構アジア経済研究所研究員、国際日本文化研究センター准教授を経て、2008年10月より現職。著書に『現代アラブの社会思想』（講談社現代新書、大佛次郎論壇賞 2002）、『書物の運命』（文藝春秋、毎日書評賞 2006）、『アラブ政治の今を読む』、『イスラーム世界の論じ方』（中央公論新社、サントリー学芸賞 2008,2016）、『中東危機の震源を読む』（新潮選書 2009）、『イスラーム国の衝撃』（文春新書 2015、毎日出版文化賞特別賞）、『サイクス＝ピコ協定 百年の呪縛』（新潮選書 2016）など。第12回中曽根康弘賞優秀賞受賞。

ただくように相談してまいりました。奥の院の御廟で今朝ご相談をしまして、まだお答えはいただいていないのですが、多分ご登壇いただけるということでもうひと方ご登壇いただきたいと思います。（ステージ上に弘法大師の像が現れる）

まずこのＴＤトークからご参加になっております四人の先生がたに自己紹介していただきます。ではまず宇野先生よろしくお願いいたします。

宇野重規所長　東京大学社会科学研究所の宇野です。政治学者で、民主主義を長年研究しています。「民主主義とは何か」について書いたり、今は朝日新聞の論壇時評を毎月担当したりしております。

政治学ですが、いわゆる近代の政治学はイギリスの哲学者トマス・ホッブズとその著書である「リヴァイアサン」に始まり、そこにある種の原罪があると思います。ホッブズは何をしたかといいますと、戦争状態の話をして、そこから逆算して国家の形成の話をします。ホッブスの有名な言葉、「万人の万人に対する闘争」とは、自分の利益のためにお互いが闘争すれば戦争状態が不可避になり、これを避けるためには人々が従わざるを得ない強力な国家をつくるべきだと説くものです。その強力な国家をリヴァイアサン、旧約聖書に登場する怪物レビアタンに喩えたものです。

確かに国家がなければ暴力が横行するでしょう。その一方、国家自身が生み出す暴力や戦争もある。さきほどマンハッタン計画の話もありましたが、そう考えてみると、国家を作れば、およそ戦争がなくなるかといえば、決してそんなことはない。そのことがわかったのが、我々の近代の歴史だと思います。

デイヴィッド・グレーバーという人類学者がいて、新石器時代から１万年ぐらいの間、実は強力な国家なんかなくても人間は生きてこられたと言います。ホッブズ以降５００年間ぐらいの間、強力な国家がないと生きていけないと思い込んできたけれど、１万年ぐらいの範囲で振り返ると、人類はいろんな形の組織を作ってきたわけです。この５００年間の偏見に我々は必ずしも囚われる必要はないのかもしれません。その一方で、グレーバーはアナーキズムを主張しますが、政治学者とすると、ちょっと待った、国家はやはり必要だよと言いたくなります。私は国家だけが絶対ではないし、アナーキズムの可能性もあると思いますが、今日は国家と暴力という話でお話をできるといいなと思っております。私からは以上です。よろしくお願いします。

杉山所長　ありがとうございます。では太田

左から宇野重規所長、太田博樹教授、池内恵教授、国末憲人特任教授

先生よろしくお願いいたします。

太田博樹教授　こんにちは、太田と申します。私はゲノム情報を基礎にして、ヒトの進化を研究する人類学、人類学ときくと皆さんは文化系の人類学と思うでしょうけれど、東京大学と京都大学には理系の人類学がありまして、私は理系の人類学、自然人類学を専門にしております。今日のテーマについては、最初に時間を追って考えてみたいです。フロイトとチャールズ・ダーウィンの「種の起源（原）」は時期として重なっています。『種の起源（原）』は１８５９年に初版が出ています。その直前の１８５６年に初めてネアンデルタール人の骨が発見されています。１９７４年に、アウストラロピテクスの全身骨格が見つかり、人類が立って歩き始めたのが先だったのか、脳が大きくなったのが先だったのかがはっきりとわかりました。

その後、２００３年にヒトゲノム解読計画っていうのが完了しました。マンハッタン計画のお話をさっき小泉先生がされましたけども、マンハッタン計画の指導者はロバート・オッペンハイマーですが、ヒトゲノム解読計画を主導したのはジェームズ・ワトソンという人です。今から20年あまり前、ごく最近です。以後、技術革新が激しく起こり、みんなのゲノム情報が読めるようにしようとすごい勢いで広まりました。そういう時代になり、ゲノムを調べることによってヒトがどう進化してきたかがわかるようになりました。元々ヒトゲノムは医療や創薬の目的で解読されてきましたが、ヒトの進化についての研究にも大きな影響を与える存在になりました。

２０２２年には、ノーベル生理学・医学賞を受賞したスヴァンテ・ペーボ先生がネアンデルタール人のゲノムを解読しました。ネアンデル

PROFILE

国末 憲人
東京大学先端科学技術研究センター・特任教授

専攻は欧州政治、紛争研究。1963年岡山県生まれ。1985年大阪大学卒業。1987年に紀行「アフリカの街角から--サバンナ人間紀行」で第3回ノンフィクション朝日ジャーナル大賞優秀賞を受賞。同年、パリ第二大学新聞研究所を中退し、朝日新聞社に入社。パリ支局長、GLOBE編集長、ヨーロッパ総局長、論説委員などを務め、2023年退職。2024年1月より現職。著書に『イラク戦争の深淵』『ユネスコ「無形文化遺産」』『テロリストの誕生』『ロシア・ウクライナ戦争 近景と遠景』など。

杉山 正和
東京大学先端科学技術研究センター
所長 / 教授

専門はエネルギーシステム分野。2000 年、東京大学大学院工学系研究科化学システム工学専攻博士課程修了。博士（工学）。
2016 年、東京大学大学院工学系研究科教授、2017 年より東京大学先端科学技術研究センター教授、2022 年 4 月より所長を務める。

会場のステージ上に現れる弘法大師像

タール人のゲノム解読をしてノーベル賞受賞は何となくピンとこないという方が多いと思います。では、何が重要かというと、1990年代ぐらいまではネアンデルタール人とホモサピエンスは別種であり、それでいて脳の大きさはほぼ変わらない、生き残った我々の方は、知性だけじゃなく人間性を備えていて、人間性を備えているサピエンスは80億人にまで発展したけれども、ネアンデルタールは絶滅したという説明をしていたんです。しかし、ネアンデルタール人のゲノムを読んでみたら、我々のゲノムの中にはネアンデルタール人のゲノムが1%から2%ぐらい含まれていたということがわかりました。つまり交雑をしていて、別種とは考えにくいということになりました。そうなると、まずネアンデルタールが3万年前になぜ滅び、なぜ我々は滅びなかったのかという疑問点が出てきました。もう一つの大きな疑問点は、その生き残った方にあった「人間性」とは何かということです。今日はそういった話もできればいいかなと思っています。

杉山所長　どうもありがとうございます。では今度は中東地域を専門に、思想史それから現在の政治、宗教まで幅広く俯瞰されて、実際の現場の方々と対話をされている池内先生からお話しいただきたいと思います、よろしくお願い

します。

池内恵教授　東大先端研でグローバルセキュリティ・宗教分野という研究室を主宰しております池内と申します。もともとイスラム思想を研究しており、先端研でもイスラム政治思想分野という小さな小さな私一人だけの研究室を作っていただいて、10年間ほど運営しておりました。その間には中東で「アラブの春」の大変動もあり、「イスラム国」も勃興するなど、イスラム政治思想研究者として非常に忙しく過ごしました。その後、イスラムだけでなく世界の諸地域も含めて宗教と安全保障の関係を研究するグローバルセキュリティ・宗教分野を作ってから、5年以上が経ちます。宗教と安全保障の関係には、戦争というものが否応なく含まれるので、そこも扱っています。

一般的な、要するに西洋中心の政治学、あるいは政治思想を扱うことと、イスラム思想から見ることができるものが違うかといいますと、人類普遍の信念がもしあるとしたら違わないはずです。しかし、現実には違います。小さなテロリズムと呼ばれるような紛争から、国家間の戦争、多国間の戦争、あるいは超大国を巻き込む戦争まで戦争にはいろいろな形態がありますが、イスラム思想を根拠にした倫理規範に基づいて、どのように人間の共同体ができ、普段秩序が保たれていて平和があるのかを考慮しないといけないわけです。

『ひとはなぜ戦争をするのか？』の中には、アジアや日本、そして高野山は登場しないのですが、フロイトとアインシュタインの対話には、イスラム世界は存在しています。この本の32ページには、トルコが攻めてくるとかいう話とか、37ページには、逆にキリスト教徒の間で仲間割れがあるとイスラム教徒と手を組む輩が出てくる、などという話も出てきます。キリスト教と西洋の議論の中では、外部だけどすぐそばにある相手、自分たちとは別のもの、そして敵対しているが仲良くなることもある、という存在として扱われてきているもの・・・、それを私は扱ってきたということになると思います。そういうイスラムの世界を考えずには、おそらく人類普遍の何かというものは見出すことはできないと思っております。以上です。

杉山所長　池内先生、視野を広げていただきましてありがとうございます。それでは最後に、国末先生からお話いただきたいと思います。よろしくお願いします。

国末憲人特任教授　よろしくお願いします。私は科学とも技術とも全く縁のない人間です。先端研に着任する前は36年間、朝日新聞の記者として、主にヨーロッパ政治に関わることが多く、紛争の現場にも行きました。１９９４年のルワンダ内戦で現地に行ったのが最初で、その後イラク戦争、ジョージア紛争からナゴルノ・カラバフ、今回のウクライナという戦争の現場報道もしてきました。２０２２年からウクライナに6回行き、同年12月にキーウで宿泊していたホテルにロシア軍のミサイルが落ちて閉じ込められて、救出されました。悪運を使い果たしたと思っていたら、２０２４年の4月から5月にかけて2週間ウクライナに滞在している間に、今度はドローンがホテルに落ちました。幸い、チェックアウトした日の夜に落ちたので無事でした。そ

うした紛争や戦争の現場からの報告をしてきたわけですが、このアインシュタインとフロイトの対話の中でも、理論家ばかりに聞いたら駄目だという話が出てきました。理論で戦争することと、現実に戦争をすることとは、個別の事情が影響するので異なります。もちろん、理論を研究するのは重要ですが、一つ一つのそれぞれの現場を見て、その上で戦争というものを考えていきたいと思っています。

杉山所長　国末先生、どうもありがとうございました。今回そして今後も続くこの議論では、この「Why War? ひとはなぜ戦争をするのか？」という問題の解決を何とか目指していきたいと思うわけです。こうした議論というのは拙速に進めてはいけない、しかし複数回開催することによって、ある意味のリアリティを持って理想像と人間のサガというものを考えつつ、どうにか有効な打ち手というものを得ていきたい、と考えています。

小泉先生はご自身の話をほとんどされませんでしたが、小泉先生はＭＲＩ等を使った脳計測の第一人者で、サイエンスだけなく日立で商品化つまり社会実装もされました。今回のテーマについても深い示唆をお持ちだと思います。さきほど中島先生がご指摘された、フロイトのいう人間の家畜化、人間が自然を支配しているという価値観、これらに関してまずタイムスケールがあるわけですね。進化の歴史、1万年かけて人類は進化してきて、一方でマンハッタン計画が行われたのが今から１００年前です。そういうタイムフレームに沿って、人間は他の動物とどう違うのかあるいは同じなのか、あるいはその人間が他の動物と違うとしたら、それが人にどう影響し戦争に駆り立てるのか、という観点から「Why War? ひとはなぜ戦争をするのか？」の答えを導けるのか議論していきたいと思います。

まずは長い歴史のなかで、ハードウェア的な観点から、太田先生に今の人間と動物、あるいは人間の家畜化というキーワードに対してどうお考えなのか伺います。

太田教授　中島先生のご指摘の通り、フロイトがちょっと勘違いしていると思うのは、生物学的に健全であることが戦争するという言い方をしているんです。でも戦争をするのは人だけで、他の哺乳類はしないのです。実際、私自身の研究ではないのですが、チンパンジーは子殺しとかをするのが例外的で、他の哺乳類が、雄同士がメスを奪うため殺しあうケースはいくつか報告があります。同種同士で殺し合うのは、我々に近いチンパンジーか人です。だからフロイトのいう生物学的に健全なための戦争はないと思います。フロイトがこのような考えを持つ背景には、その時代にはまだゲノムもなければ、ヒトの進化についてはほとんど何も情報がなかったということがあると思います。

小泉フェロー　家畜化という概念を考えた時、では教育とはどういうものなのかと考えます。人間しか持ってないのが教育ですね。親が教えているように見えるから行動学者が長年研究し、霊長類学者も研究してきましたが、教育を体系立てることはチンパンジーでもほとんど見られない、そのぐらい教育というのは人間独特なんですね。極端な例では催眠的なもので入る方法も、考え方の基本のところ、心の一番奥底に入っていくテクニックも実際あり、それと教育とは峻別しないといけないです。ＯＥＣＤでの経済成長や衡平の議論でも、結論のところで必ず「教育」の話になるのです。「教育」という視点は今回のテーマにおいても、最終的に最も重要な解決法のひとつになるのではないかと考えます。

杉山所長　ありがとうございます。とても重要なポイントですね。では思想史を研究している宇野先生の研究対象は人間の中のダイナミズムだと思いますが、人間と動物はどう違うのか、また、思想史から見たときの今出てきた観点、すなわち教育が戦争にどう影響するのか、お考えをお聞かせください。

宇野重規所長　政治学にとって「動物」は実は重要です。古代ギリシアのアリストテレスは人間をポリス的動物と説明し、人間は神のように自己完結できないため、言葉を介して仲間を作り、そこが人間の人間たる所以であると説明します。つまり、人間が言葉を介して仲間をつくる動物であるというのが、アリストテレス以来の西洋政治学の理解だと思います。

1万年前、いわゆる新石器革命があり、人間と動物に大きな差が生じたと思います。いわゆるダンバー数によれば、脳の大きさによって集団の数は大体決まるといわれていて、人間は大体150人ぐらいの集団が自然であるそうです。それが何千万、何億人という大きな組織を作るようになり、人類が動物から離れる大きな分岐点となりました。人間の脳が作った抽象化能力から言語が生まれ、宗教も生まれ、国家も生まれてきたわけですが、それが人類を幸福にしたのかどうかが今問われていると思います。

ちなみに、政治にとって教育はとても重要ですが、政治学者は教育に夢を託しては皆破れてきたのです。だから教育は鍵ではあるものの、プラトンもルソーも迷走し失敗してきたのが政治と教育をめぐる思想史の知見だと思います。

太田教授　教育しかないと私も考えています。なぜなら、時間の感覚を持ち、未来を意識することができるのはヒトだけです。たとえば、チンパンジーは瞬間的な時間のみを理解し短期記憶はすごく優れていますが、人間の短期記憶はそれに比べると劣りますがその反面、長期記憶は非常に良いので教育ができます。教育によって文化を伝えるというのは人の生物学的特徴としてあります。

先ほど宇野先生が集団の集団規模についてお話しされましたが、集団遺伝学者にはeffective population size（有効集団サイズ）という概念があります。これは理想的に生殖ができる人の数、遺伝的な多様性にもとづく数で、ヒトの場合、1万人ぐらいです。約30万年前に誕生し約6万年ほど前にアフリカから地球全体へ広がったことは今のゲノム解析でわかっています。6万年とは非常に短い時間なので、ヒトは遺伝的に均質なんですね。だからクローンなのかというとそうではなく、全世界の80億人全員が違うゲノムを持っている状態です。個性は全員持っている、けれども、チンパンジーなど他のサルと比べると極めて均質です。

そう考えると、中東や西アジアの親戚同士で殺し合っているような感じです。ハードウェア的にはものすごく均質だということがゲノ

基調講演をする小泉秀明フェロー

ムの情報から言えると思います。

池内教授　例えば、アリストテレスは地中海世界で共有されていて、イスラム教の諸学も、論理的に考える時、体系化する時にはギリシャ哲学を使って思考しています。中東と西洋は、同じような論理を使って違うことを言っていますよね。

さきほどの規模という話で、人類の集団は動物と比べて複雑であり、例えば地球の裏側でも同じ共同体の中に属しているのだということで、シンボルや言葉を使い、直接会うこともないような人たちと共同体を作るようになりました。

イスラム教は、大きな規模で人類を集団化することのできる仕組みで、ある共同体の教育をすることに最適化したものであると考えております。それはユダヤ教やキリスト教と比べてもうまくできています。

キリスト教からは分派がどんどん出てきますし、反対にキリスト教をやめる人もたくさん出てきます。ユダヤ教はというと、特定の部族、血縁がある人間の子孫だけが正しい教育を受け、正しい秩序、正しい法倫理の体系を受け容れられるわけです。その考え方に対して、アインシュタインもフロイトも先ほど話題にあがった科学者たちもユダヤ系です。多くの人たちは、ユダヤ教を否定して何らかの普遍的な人類、人間性というものを考えようとしました。そうして、人文社会科学のフロイトも出れば自然科学のアインシュタインも出ました。一方で、イスラム教の考え方は、宗教を否定して人間性に依拠するのはうまくいかない、人間があまりにも多様であまりにもたくさんいて、まとまりや秩序や共通の倫理がないから、もっと単純な「法」というものを定めて、「法」の教育をしていくということで秩序を作るというものです。

その秩序と、世俗化した近代西洋が作る秩序とが、どこかでぶつかる衝突を覆い隠すことができなくなったのが、20世紀後半から今も続く問題だと思っております。

中島所長　アインシュタインもフロイトも「我々」というアイデンティティを強調します。その際、一体「我々」とは誰なのだろうという問いが残ります。皆さんの普段の生活においても、さまざまな「我々」に所属しているわけで、それは複数的でたまには矛盾したりもします。

基調講演をする中島隆博所長

ところが、国家あるいは超国家を考えていくと、それが抽象化されて「我々＝宗教」になる場合があります。最終的にはある種の「全体主義的な我々」を持ってきて、国家のために死んでもかまわないという言説が容易に蔓延していくわけです。

戦争というのは、国家のために死ぬこともできるわたし、我々のために死ぬことができるわたし、という教育もしくは言説を作り上げていく装置なわけです。

そうであれば、国家を今までとは違う仕方に再編しなければいけないだろうと、わたしは思っているわけです。80年代には国民国家批判がなされたわけですが、超国家的な非常に強力な世界政府みたいなものが構想されました。それも含めて、国際連盟、国際連合もそうですが、カント的な世界政府がイマジネーションのもとにあるわけです。

でも、それは多分間違っていて、必要なのは、もっと小さい数のアソシエーションが積み重なり折り重なっているような新しい世界のあり方です。それらは、閉じたものではなく開かれているのだと思います。そういう新しい制度を考えるときに、人格神みたいなものは邪魔です。特に一神教的な発想が邪魔です。

そうした「一への統合」はもうやめるべきで、もっと開かれたアソシエーションへと国家をサイズダウンをしていくこと、その上でアソシエーション間の連携を考え直そうとすることこそが政治的な構想力だと思います。ホッブズ的なものに決別をした方がいいと考えます。

宇野所長　アソシエーションは賛成です。私はアレクシ・ド・トクヴィルという「アメリカのデモクラシー」という本を書いた思想家の研究からスタートしました。アソシエーションは思いを同じくする人間が他の人間と対等の立場で協力し合う関係と定義されています。アソシエーションがたくさんある社会は良い社会だというのがトクヴィルの教えです。日本でも福沢諭吉が「慶應義塾社中」と名乗りましたが、「社中」をアソシエーションの訳語としたわけです。坂本龍馬の亀山社中も同志の横の連帯という意味で、やはりアソシエーションです。一方、さきほど中島先生がカント的な世界政府については否定的にお話しされましたが、私はイマヌエル・カントの世界史理解を評価しています。利己的な個人や国家は互いにぶつかり合い、本来的には非社交的です。しかし、そのぶつかり合いの中で少しずつ社交性を獲得していく。これがカントの「非社交的社交性」理論で、国際連盟はカントの思想が実現したものだとよくいわれます。単に国際的な組織ができたという意味だけでなく、第一次世界大戦後に、人類が破壊的な悲惨なことをして痛い目にあい、そこで初めて、戦争をしていると人類が滅んでしまうから、と一歩社交性を獲得したわけです。

カントのいう非社交的社交性の歴史は、長い目で見れば説得力があると思います。人類は多様であり、互いに利己的であるが、それでも、長期的には破壊衝動を抱えた人類が社交性を拡大していく。この歴史を否定してはいけないのです。この20世紀にできた仕組みは、現在明らかに機能不全を起こしていて、そこから前に進むためにはイスラムやアジア、日本などの知恵を取り入れた形で、新しい「非社交的社交性」の文化や文明を作らないと無理だと思います。

国末特任教授　暴力と戦争は重なっていますが、違う面もあります。暴力を全部抑えるのはなかなか難しい。でも戦争は防ぐことはできます。中世のヨーロッパでは、騎士が戦争をする横で農民は畑を耕してきたわけです。だから、民間人をあまり巻き込まないある種のルールに基づいて戦いが行われていたと言えないこともありません。第一次世界大戦後に戦争が民間人を大きく巻き込むようになった一つのきっかけは、１９３７年のドイツによるゲルニカの無差別空爆だったと言われています。それから原爆投下や東京大空襲といったように民間人を標的にすることが普通にな

り、それが先日、ウクライナで起きたロシアによる病院への攻撃に繋がっていくわけです。戦争で民間人を狙ってはいけないと国際法で決められていますが、そういうルール運用がしっかりできれば、それだけで戦争はなくならないけれどよりマシな状況になると思います。第二次大戦後にジュネーヴ諸条約や国際法廷の整備でルールが確立されてきて、現在ではプーチン大統領やネタニヤフ首相がICC国際刑事裁判所で訴追されています。そういったことがニュースになると、訴追された本人が外国に行けなくなる、という現実的な影響も出てきたりしているわけです。そのようなある種の進歩があったことからも、悲観的になる必要はないとは思います。

杉山所長　国際的な規範というものの実効性が発現するのではないかという期待も少し持てる状況かなと思います。世界政府あるいは世界的な紛争抑止の規範というものが、より実効性を強めて国家あるいはその集団の暴走、人類をお互いに破滅し合うほどの行動に至るような動きを、抑止できるような実効性が今後もっと増えるのでしょうか。

国末特任教授　世界的な政府ができるかというとなかなか難しいとは思いますが、国際的な規範による実効性は高まる方向に向かっていると思います。国連をつくってきた国際法の体系をいろいろな面で強化していくべきでしょう。ただ、現在は逆のことも起きています。例えば、プーチン大統領が核兵器を使うと脅すことによって、核兵器を巡る国際法である核不拡散条約は危機に陥っています。米露間の核軍縮に関する条約も、あるかないかわからない状況になっています。中国は核兵器を相変わらずたくさんつくろうとしていますし、北朝鮮もしかりで、その点では悲観的にならざるを得ません。

杉山所長　イスラム周辺で研究・考察をされている池内先生から見たとき、アソシエーションをベースにした世界秩序を目指すべきではないかという、中島先生からのご提言について、どういうご意見をお持ちなのか興味があります。

池内教授　目の行き届く身近なアソシエーションを求める動きは、人類にとって不変的なものだと思います。中立的なアソシエーションを作るときには、背景にある人間主義、普遍的な人間意識に基づいたアソシエーションというのが想定されます。それで人間は結びつけられるのか？　既存の国家や企業、大学、あるいは情報で繋がったグローバル世界における人間の繋がりは、実は大きな弊害をもたらしているということを人類全体が気づいたとします。その繋がりを透明化したアソシエーションを、友愛的な目に見える関係で取り戻す可能性はゼロではないと思いますが、その前に例えば血縁などが戻ってくると思います。紛争を行なっている国家に耐えられなくなると人々は中立的なアソシエーションに行くのではなく、まずは信頼できる、または信頼できると思える血縁のもとに行くわけです。そう考えると、透明で中立的なアソシエーションに行くのは非現実的な気がします。グローバル社会の近代的組織国家の問題を認めざるを得なかった人は、血縁とか地縁を頼ると思います。その地縁の中に宗教や民族を超越した何かが生まれることもあると思います。しかし血縁で繋がることは多くの場合、必ず宗教が関係してきます。そうしたことから、アソシエーションと宗教の関係をどこまでも拭い去ることはできないです。

今日のテーマではユダヤ系の科学者や哲学者などが多く出てきましたが、近代社会において、その血縁の問題でユダヤ人はキリスト教主導の西欧の主流派の人たちに疎外されてきたという歴史がありつつ、逆にその血縁に基づく民族というものを超えるような思想もユダヤ系の人々が作ってきました。それが新たな「我々」を作ろうとしています。しかしその新たな「我々」から疎外される傾向の強い

TD トークで話しをする宇野所長（左）

イスラム教徒の人たちからすると、現代の新たなアソシエーションも、ヨーロッパとかユダヤ系、またはユダヤ系と関係の深いキリスト教といった変えることのできない血縁的地縁的秩序によって成り立っていることになると受け止めているのではないか。それに対してイスラムの理念と血縁地縁の両方に支えられた別のアソシエーションを発見し守ろうとしているのではないでしょうか。

中島所長　アソシエーションというのは一つの夢なわけですよね。夢として語られてきて、旧ユーゴスラビアはまさにアソシエーション国家でした。でもそれが破綻した後、ユーゴの内戦が起き、アソシエーションとは悪夢にもなるのだな、ということを思い知らされるわけです。そういうことでいえば、アソシエーションではなく池内先生のおっしゃった、地縁とか血縁に行くのではないか、という批判も当然あるだろうと思います。ただ、例えば日本の歴史を振り返ってみると、あるいは東南アジアのイスラームを見ていくと、アイデンティティが多様で複数のレイヤーを持っています。典型的なのがこの高野山で、中心にある神社が仏教の高野山を守っているのです。これは本当に不思議なことですよね。そういう複数のレイヤーが重なり合うアソシエーションがあったわけです。レイヤーとはいろ

んなものに属していたわけで、地縁も血縁もそこにはあったでしょう。

透明なアソシエーションは結構難しいと思います。組織の中にいる人には、exitとvoice（経済学者のアルバート・O・ハーシュマンの、離脱もしくは発言により不満を解消するという理論）のvoiceの権利が与えられる、そうした開かれたアソシエーションを考えざるを得ないのではないでしょうか。あるいは、そういうレッスンをしておかないと、宇野先生のご専門のデモクラシーは結局、机上の空論に終わってしまうのではないか。そういう危機感を持っているわけです。投票して議員を選ぶなどに代表されるような民主主義（デモクラシー）とは単なる制度ではなく、どのように人々が繋がって社会を作り、どういう方向に向けていくかというエンゲージメントが絶対に必要なわけです。エンゲージメントがあるということは、中立でも透明でもないのです。いろいろなインターフェースと利害・関心がそこに入ります。その中で、調整をどのようにするのかが知恵の見せ所だと思います。

中国にもアソシエーション論があり、例えば「党」という利害関心に基づくアソシエーションと友愛に基づく「朋」、この二つの関係を巡りどちらがより優れているのか、結果的には結論は出ていませんが、それをずっと議論してきています。

友愛関係を発展させたアソシエーションだってありうるでしょう。利害に基づいたアソシエーションにも調整の技法があるでしょう。そういった議論を積み重ねて、試してみたらいいと思います。

民主主義に関しても、わたしはダンバー数なみの基礎自治体に戻した方がいいと思っています。たとえば、東京都のような大きな規模での民主主義は無理だと思うので、社会的なソーシャルイマジナリーを変えて備えておく必要があると懸念します。

杉山所長　多様な意見が出て、中身の濃い議論ができたかと思います。予想通り、議論の収束は見ませんでしたので、この議論はぜひ今後も続けていきたいと思っています。

その今後の議論に繋げるための論点の抽出、もっと議論していくべきテーマ、あるいは今日議論したことでもいいですし、全然違う観点から思うことなどを最後に一言ずつお願いします。では、国末先生から順番にお願いします。

国末特任教授　今日の話の中で、教育の重要性が話題になりました。教育というのは、例えば火事に備えて防火水槽をつくり消防車を買うといった長期的な視野の話です。それは核戦争に対しても重要ですが、一方で今、あちこちで火事が起きているので、その対策についても考える必要があります。それぞれの火事について、それぞれ対処法を考えながら、それらが最終的には結びついて、一つのケースにとどまらない普遍的な解決方法に発展する。そのような考え方が必要な時代だと思います。

池内教授　今日は人類と動物という二分法を巡りいろいろな考えがあることを話してきました。ＡＩは人間の頭を外部化していく動き、それがどんどん進み、人類はこれからどのように戦争をするのかにとどまらず、共同体のあり方自体も、個人と共同体のあり方もかなり変わってくると思います。その変化における戦争や共同体のあり方に対応する、平和に向かう方法についても考えていくべきと思います。

太田教授　さきほど、ホモ・サピエンスはすごく均質だという話をしました。ゲノムが解明されたことにより、人類集団間は亜種ほどの差がないことがわかりました。それで、そんなに差がないので、ヨーロッパ、アジアやアフリカを昔はコーカソイドとかネグロイドという言い方をしましたが、そうした言葉を使わないことにしています。

地域的な集団差はありますが、少なくとも遺伝的に定義できる人種はなく、何か集団を定義した場合は他との差が計算上出るところまで定量的に理解できるようになってきました。

そうしたことをベースに議論していくのが一つの方向性かと思います。

宇野所長　今日の話では、ホッブズ型の国家はたかだか500年ぐらいの歴史なのでそれに必ずしもこだわる必要はなく、もっと頭を柔らかくしようということが言えると思います。あと、今、カントの「非社交的社交性」でいくと、我々は現在かなりつらいところにいますが、それでも長い目で見れば人類は絶対に前に進むはずだと思います。そう言いたいというのがメッセージでした。

ただ、あえて言うと、まだ前に進むまでに時間かかりそうです。ひょっとして私たちが生きてる間には、停滞期が続くかもしれません。そう考えると、何か平和のために具体的に自分にできること、今この瞬間自分がすべきことをこれからもぜひ議論していきたいと思います。

中島所長　前半の自分の基調講演では、最後にアインシュタインの『晩年に想う』（講談社文庫）から「科学と宗教」を引用しました。戦争を考えるときに、科学あるいはテクノロジーが果たしている役割を深掘りしとかないといけないなと思います。

ドイツの哲学者マルティン・ハイデガーは、20世紀の最大にして多分最悪の哲学者だと思いますが、彼はテクノロジーの本質は"Ge-stell"（ゲシュテル）だといいました。"Ge-stell"は変なドイツ語で、以前は「集立」と訳していましたが、今では「総駆り立て体制」と訳します。つまりハイデガーは、人間を駆り立ててある方向に持っていくのがテクノロジーの本質だと言ったわけです。ただわたし自身は、テクノロジーが果たした役割は、我々の思考の条件にまでもっと深く染みわたっているのではないかという危惧を持っています。その中で、戦争が新しい形式をとってしまうのではないか、それを大変恐れているわけです。

例えばＡＩがまさにその典型的だと思いますが、ＡＩが兵器になることはもう現実的なわけですよね。その場合、一体戦争というのはどういうものになるのか、そのテクノロジーにわたしたちはどう向かっていけばいいのか、これは今後考えていきたいテーマだと思います。

杉山所長　まだまだ議論を続けていきたいと思いますが、そうすると高野山会議２０２４のクロージングイベントができなくなってしまいますので、このセッション「Why War? ひとはなぜ戦争をするのか？」は、高野山会議でもまた来年できればアップデートした形で続けていきたいと思いますが、多分１年後ですと世界の情勢も変り、議論しなければいけないポイントも多々ありますので、１年後まで待てないですね。ということで、今後、会場を変えながら様々な形式でこの議論を続けていきたいと思います。